

重松清

あすなろ
三三七拍子

上

連続ドラマ化
7月15日(火)スタート!

フジテレビ系毎週火曜よる9時～

思い通りにならない人生を、本気で応援する男!!
柳葉敏郎、剛力彩芽ほか出演



講談社文庫

あすなろ三三七拍子(上)

重松 清

講談社

〔著者〕重松 清 1963年岡山県生まれ。早稲田大学教育学部卒業。出版社勤務を経て、執筆活動に入る。'91年『ビフォア・ラン』でデビュー。'99年『ナイフ』で坪田譲治文学賞、『エイジ』で山本周五郎賞、2001年『ビタミンF』で直木賞、'10年『十字架』で吉川英治文学賞をそれぞれ受賞。小説作品に『流星ワゴン』『定年ゴジラ』『きよし』『疾走』『カシオペアの丘で』『とんび』『さすらい猫ノアの伝説』『峠うどん物語』『かあちゃん』『空より高く』『ファミレス』『ゼツメツ少年』『赤ヘル1975』他多数がある。ライターとしても活躍し続けており、ノンフィクション作品に『世紀末の隣人』『星をつくった男 阿久悠と、その時代』、ドキュメントノベル作品に『希望の地図 3.11から始まる物語』などがある。

あすなろ^{さんさんなびようし}三三七拍子(上)

しげまつ きよし
重松 清

© Kiyoshi Shigematsu 2014



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2014年1月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——株式会社精興社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277737-7

目次

序章 運命の一日……9

第一章 学ランデビュー……34

第二章 大物ルーキー登場……96

第三章 春の嵐……142

第四章 あすなろルネッサンス……212

第五章 初陣……305



講談社文庫

あすなろ三三七拍子(上)

重松 清

講談社

目次

序章 運命の一日……9

第一章 学ランデビュー……34

第二章 大物ルーキー登場……96

第三章 春の嵐……142

第四章 あすなろルネッサンス……212

第五章 初陣……305

下巻

第五章 初陣（承前）

第六章 さらに友よ

第七章 そして父は途方に暮れる

最終章 合言葉は押忍！

文庫版のためのあとがき

あすなろ三三七拍子 上

序章 運命の一日

朝のうちは陽が射していた空に、正午をまわった頃から雲が広がってきた。天気予報によると、本日は晴れのち曇り、午後とところにより雨——激しい雨にみぞれも混じるかもしれない、とキャスターは伝えていた。

「だめだな、降るぞ、これは……」

庭に出た藤巻大介は、空を見上げて顔をしかめ、まいっちやつたなあ、と首をかしげた。

バーベキューをするつもりだった。

妻の典子のりこや一人娘の美紀みきには「外は寒いんじゃないの？」と言われたが、断固として庭でバーベキューをするんだと、三日前、美紀が恋人をわが家に連れて来ると言ったときから決めていた。

「翔くんしょうくん、来てもいいけど、つて言ってくれたから」

美紀の言葉を聞いて、ムツとしたのだ。

なんだあの言い方は、と典子にあとで毒づいた。

逆だろう逆、俺たちが「遊びに来てもいいぞ」って言うのがスジだろう、なにが「来てもいいけど」だ、こつちが頼んでるわけじゃないんだ、だいいち日本語がおかしいじゃないか、「来ても」じゃなくて「行つても」だし、ああ違う違う、「おうかがいさせてください」つてのが正しい言葉づかいだろう、ろくな奴じゃないな、うん、会わなくてもわかる、大学生のくせに附属高校の女の子と付き合うなんて、めっちゃやないか、とんでもない野郎だぞ……。

すべて、美紀が自分の部屋にひきあげてから言つた。面と向かつては、なかなか文句をぶつけられない。高校二年生の娘の「うぜーっ」の一言が胸にズキンと刺さり、「だったら家出しちやおうかなあ」のつぶやきを、ただの脅しとはわかつていてもつい真に受けておろおろしてしまう四十五歳、弱い父親である。

とにかく、今日はバーベキューだと決めていたのだ。そのためにホームセンターまで出かけてコンロや炭を買い揃え、ガーデンチェアとテーブルのセットも新調した。建売住宅の猫の額ほどの庭はますます窮屈きゆうくつになつてしまい、「こんなテーブル置かれたんじゃ洗濯物も干せないじゃない」と典子にぶつくさ言われたが、それでも、とにかく、なにがあつても、断固として、大介はバーベキューにこだわつた。

リビングの窓を開けてテラスに下りてきた典子が、大介と同じように曇り空を見上

げて、「やっぱ無理じゃない？」と言った。

たとえばそう思っていて、横から言われると、やはり意地を張りたくなる。

「だいじょうぶだよ」

大介は胸を必要以上に張った。

「お鮎でもとればいいじゃない」

「そんなことしないでいい。贅沢ぜいたくさせるな」

「じゃあ、ピザかなにかにする？ 簡単なものでよかつたらウチでも何品かつくれるし」

だめだ、と大介は首を横に振った。

「いいか、ゆうべも言っただろう。べつにこっちが歓迎する必要はないんだ。今日は、試験みたいなものなんだ。その、シヨウだかダイだか知らないけど、そいつがほんとうに美紀にふさわしい男かどうか、きっちり見抜かなきゃいけないんだぞ」

そのためのバーベキューなのだ。

炭の火熾ひしから、翔にやらせる。肉を切り、野菜を切り、食材を串に刺すところも、しっかりと観察する。コンロの火、肉の焼きかげん、塩こしょうの振り方、ソースの足し方、食べ方、空いたビールの缶の片付け方に至るまで、翔の行動すべてをチェックする。

鮓やピザなら、ただ食べるだけだ。鍋物の支度や段取りも、たかが知れている。やはり、バーベキュー——なのである。

「夏の社員旅行でよくわかったんだ。バーベキューってのは人柄が出るんだ。口ばかりで手をちつとも動かさない奴もいれば、黙々と働く奴もいる。がつついて生焼けのを食っちゃうバカもいるし、目の前で焦げて炭になってる串に気づかない間抜けもいる。ふだんはのんびりした奴がうまく風上に回ったり、ずぼらだと思ってた奴が意外と野菜の色のバランスにこだわりながら串に刺したり……。ひとが焼いてた肉をパツと取っちゃう奴もいるし、後片付けの前になるとすーっと知らん顔してその場から離れちゃう奴もいるんだよ、ほんとに。俺が人事部だったら、絶対にそこで人間性を見るぞ。うん。バーベキューは人生の縮図なんだよ」

はいはい、と気のない様子でうなずいた典子は、「でも、それで見抜いてどうするの？」と訊いた。

「決まってるだろ、だめな奴だとわかったら……」

「付き合わせないの？ 美紀がそれで『はい』って言うと思う？」

言葉に詰まった。

追い打ちをかけるように、典子はつづけた。

「まだ聞いたことなかったけど、社員旅行のバーベキューのとき、あなたはどんな感